

### Ⅲ—57 稲むらの火雑考

○ 大阪大学 工学部 正員 田中 清  
建設省 近畿地建 正員 星畑 国松

#### 1) 近畿の地震津波年表

|                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| 天武12年(684年) 11月29日  | 永正7年(1510年) 8月27日    |
| ○弘仁8年(817年) 8月20日   | 永正17年(1520年) 3月7日    |
| ○仁和3年(887年) 7月30日   | ×天正13年(1585年) 11月29日 |
| 延喜22年(922年)         | ×慶長9年(1605年) 12月16日  |
| ○正平15年(1360年) 10月5日 | ◎宝永4年(1707年) 10月4日   |
| ◎正平16年(1361年) 7月24日 | ◎嘉永7年(1854年) 11月5日   |
| 応永10年(1403年)        | 昭和19年(1944年) 12月7日   |
| 応永14年(1408年) 12月14日 | ×昭和21年(1946年) 12月21日 |
| ×明応7年(1498年) 8月25日  | ○……大阪の記録    ×……広村の記録 |

#### 2) 宝永の津波

大阪における死者数 皇年代略記 30,000 余人, 嘉永雜記 29,981人, 近世風俗見聞集 3,620余人, 談海統編 42,500人, 基點公記 25,000人, (理科年表等には全国の死者約5000人) 土佐においても2,000~4,000人死んだという記録が多い。広村の死者192人(他に見知りなき死者100人あり), 湯浅村の死者41人, 広川河口における推定最大波高11m。

#### 3) 嘉永の津波

嘉永5年(1852年)から安政6年(1859年)までの8年間は全国的に大地震が続いて起り, 嘉永7年には6月13日越中・越前および大和・伊勢・伊賀等に地震, 同14日・15日近畿大地震, 10月2日弘前地震, 11月3日関東地震, 安房津波, 11月4日関東・東海道大地震, 東海道各沿岸大津波, 各地火災, 箱根山崩, 富士川洪水, 死者数1,000人, このとき下田港に入っていたロシア遣使プウチャーチンの軍艦大破しこ水を救助す。11月5日南海大地震, 房総より九州東岸にいたる各地に大津波が起り, 紀伊・土佐・阿波・大坂等の被害は特に著しかった。全国の死者数1,000人。

嘉永の津波による大阪の死者数 大阪市史 273人, 鈴木大雜集 7,000人, 新聞 2,000人余, 当時の瓦版 650人(安治川口150人, 木津川口500人, 他に他国より入り込みたる者および船頭等600人) 広村の死者36人, 広川河口における推定最大波高6m。

大阪では3波が顕著で、第1波が最も高かったが、広村では、7波が顕著で、第2波と第5波が最も高かった。

嘉永7年には皇居災上, 黒船入港があり, さらにこの大地震・大津波により11月27日改元して安政1年とした。しかし翌安政2年10月2日に有名な江戸の安政大震災火災が起っている。

#### 4) 昭和21年南海大地震の津波

この南海大地震で紀州沿岸各地に波高2~3mの津波が起ったが、広村では広川河口の推定最大波高4mで、海岸堤防の天端下0.5mに達し、22人の死者を出している。

##### 5) 稲むらの火

小学校5年生の教科書に出ている「稲むらの火」の話は小泉八雲の小説「生ける神」より引用したものであって、五兵衛が岡の上から潮の引くのを見て津波を察し、自家の稲むらに火を付けて村人に急を報らせて、村人が岡にかけつけて、難を救ったとなっている。

広町における話によれば、嘉永7年11月4日の東海地震で村人は一度避難したが、翌5日は風のない穏かな上天気で、海も静かであって避難した人々も家に帰った。5日午後4時ごろ大地震が起った。浜口儀兵衛(梧陵)は津波を察知し、村人を避難させたが、自分は波に吞れ、ようやく逃れることができた。そのときは日は暮れて闇の暗さに、逃れおくれたものに道を教えるため、道畔の稲むらに火を付けて暗夜を照したという。それ以来広村では津波のとき稲むらに火を放って逃げ道を教える習となり、昭和21年の津波にも実行されたという。

##### 6) 広町の海岸堤防

和歌山県の北西岸はリヤス式海岸であり、湯浅湾は宮崎ヶ鼻と白崎の間に深いV字状湾をなし、その湾奥に湯浅町と広町とがあり、典型的な津波常襲地である。広町では古くから津波対策として海岸堤防が設けられていた。

1. 畠山氏による波除石垣(高さ1間半、天端巾1間、根巾3間以上、長さ400間)
2. 徳川頼宣(南屯院)による和田の石塘(根巾20間、長さ120間の防波堤、宝永の大津波に崩壊し、その後数回修築した。)
3. 浜口梧陵による海岸堤防(高さ2間半、天端巾4間、根巾11間、長さ500間の土堤)。

